平成16年3月8日　第3種郵便物承認　２０２５年3月１４日発行　いとしご増刊　NO、９７９

茨城県自閉症協会

いとしご増刊

IBARAKI Autism Society

ASイバラキ１２６号
定価１００円

茨城県自閉症協会　５０周年記念号

The 50th Anniversary Commemorative Issue of the Ibaraki Autism Association

CONTENTS

茨城県自閉症協会設立50周年記念事業開催　2-9P

ギャラリートーク　10-13P

「表現と仕事～一人ひとりを大切にすること」を終えて　14-15p

世界自閉症啓発デー・発達障害啓発週間　16-17p

親子スケート体験開催　18p

地区から～県北地区　19p

役員活動報告　20-21P

役員会・お知らせ　22-23P

発行人　一般社団法人日本自閉症協会　市川宏伸
東京都中央区明石町6-22築地ニッコンビル6階

編集人　茨城県自閉症協会　秋田　晴美
茨城県東茨城郡茨城町小幡北山2766－3
社会福祉法人梅の里内

「ASイバラキ」は赤い羽根共同募金の助成を受けて発行しています
赤い羽根共同募金

茨城県自閉症協会50周年記念事業

表現と仕事

一人ひとりを大切にすること

どんな障害があっても受け入れる
そんな福祉施設をつくりたかったのです

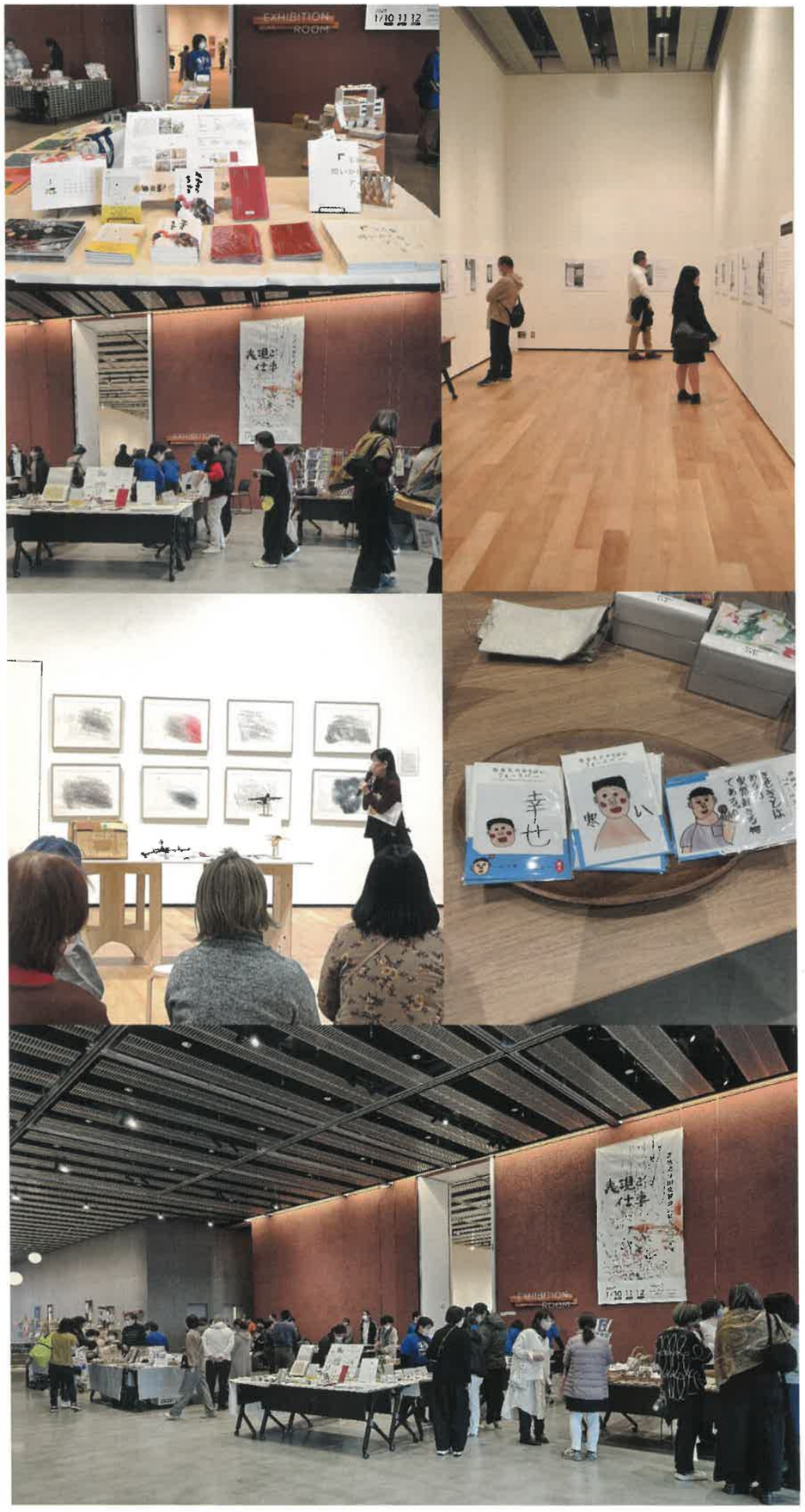
2025
1/10 Fri　11 Sat　12 Sun

MitoriO
工房集 作品展　水戸市民会館
HERALBONY　京成百貨店
ワークショップ　水戸芸術館

茨城県自閉症協会は、創立50周年を記念して、1月10日・11日・12日の3日間にわたり記念事業を開催いたしました。

期間中には延べ700名を超えるお客様にご来場いただき、当協会の50周年を多くの皆様とともに賑やかで楽しい雰囲気の中で迎えることができました。

たくさんの方にご協力いただいたこの3日間を皆様にご報告いたします。



平成１６年３月８日　第３種郵便物承認　２０２５年３月１４日発行　いとしご増刊

変化する社会に新しい視点を

誰もが豊かさを感じられる社会へ

茨城県自閉症協会は、設立50周年を迎えるにあたり、記念事業を開催いたしました。この節目に、多くの方々から温かいご支援とご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

50周年の記念として、私たちは障がいのある方々が制作した作品を展示し、多くの方にご覧いただく機会をつくりました。その中で焦点を当てたのは、普遍的でありながら、実現が困難なテーマ「表現と仕事」でした。

作品を通じて、より多くの方に新たな視点を提供し、障がいのある方々の生き方について改めて考える場になればと考えたのです。

社会福祉法人みぬま福祉会で出会ったのは、職員と障がいのある方々の間にある、かけがえのない絆でした。そこには、「仕事を教え込む」のではなく、「その人自身が輝ける環境をつくる」という思想が息づいていました。

障がい者アートの分野で著名な福祉事業所の多くも、かつては一般的な作業を仕事として提供していましたが、ある時「この作業をしていて、障がいのある方が本当に輝いているのか？」という問いに直面し、転機を迎えています。そこから彼らが導き出したのが、「その人らしい表現を尊重し、それを社会へつなげていく」という新たな在り方でした。

時代とともに、私たちの価値観も変化し続けています。

障がいのある方々の生き方や表現の可能性について、私たち自身がより多くを知り、学び続けることが必要だと感じています。

本事業の開催にあたり、社会福祉法人みぬま福祉会様、ヘラルボニー様、もうひとつの美術館様、県内各福祉事業所様には、多大なるご尽力を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。

また、本事業の実現に向け、NPO法人ちいきの学校・小堀幸子様には、2年にわたり伴走していただき、多くのご助言と支えをいただきました。その温かいご支援に、心より感謝申し上げます。

茨城県自閉症協会　会長　秋田晴美

一人ひとりが必要とされる社会

NPO法人ちいきの学校　小堀幸子

会長の秋田さんから最初に相談を受けたのは、3年くらい前のこと。その頃、わたしは厚労省の障害者芸術文化活動支援センターの準備室として相談業務を担当していました。

企画書をあたため、全体のスケジュールを立てたのは2023年の暮れの頃。2024年の7月に役員さん含め工房集を訪ね、作者一人ひとりに会えたのが今回の展示にとても大きく影響しています。

作品だけを展示するのではなく、そのプロセスや背景を伝えてほしいとお願いできたからです。また、会場奥の展示「わたしたちのいるところ」と通底する全体のトーンと方向性が決まったのもこの頃でした。

わたしの役割は、茨城県自閉症協会の思いを工房集や関係機関に伝え、展覧会の企画書やチラシ、ポスターにまとめることでした。キャッチコピーや文言一つひとつを決めていく作業の中、この展覧会を多くの人に知ってもらうためにはどうしたらいいのか？と悩むことも多く、秋田さんとの対話を重ねました。

その中で印象的だったのは、「親亡き後」の社会に対する熱い思いでした。「表現と仕事」というタイトルに、茨城県自閉症協会役員の方々の思いが深く表れています。

障がいがあってもなくても、自分たちの次の世代が安心して暮らせる社会をわたしたちは残したい。

今回の展示に関わらせていただき、一人ひとりが必要とされる社会を、地域を、一緒につくっていきたいなと強く思いました。

ご協力いただいた県内福祉事業所（50音順）

- 一般社団法人　ハッピープロジェクト　ワークセンターステラ
- 一般社団法人福祉サポートヴェリー鹿嶋
- 社会福祉法人梅の里　あいの家
- 社会福祉法人　心の和　心【Shin】
- 社会福祉法人やまびこの里福祉会　かしの木パン工房
- 社会福祉法人ユーアイ村　ユーアイファクトリー
- 就労支援施設オオダラワークス
- 障害福祉サービス事業所　たけのこ
- 生活介護事業所　やまとあい
- 水戸市社会福祉協議会　のぞみ・はげみ・みのり
- もっときらきら（特定非営利活動法人子育て支援グループひまわりのお家）
- ライフステーション樹もれび・樹林

この事業にあたり福祉事業所販売会のチラシを作成しました。ご協力いただいた事業所の詳細がご覧になれます。

社会福祉法人みぬま福祉会
工房集作品展 ギャラリートーク

1月12日（日）、社会福祉法人みぬま福祉会の職員の方をお迎えし、展示された作品を前に、その背景や大切にされている想いについてお話しいただきました。

＊お話の一部を抜粋し簡潔にまとめたものを掲載しています。

はじまり

1984年、重い障害を理由に卒業後の進路がない人が出たことをきっかけに、「どんなに重い障害があっても受け入れられる施設をつくろう」という想いで法人が設立されました。

私たちは障がいのある人たちを「仲間」と呼び、職員や親御さん、地域の人々とともに生きる社会を目指しています。

理事長は「困難は宝」と考えており、困難な状況に直面したときこそ、みんなで真剣に考え、その経験が次の支援につながると信じています。職員もこの理念に共感し、一丸となって取り組んでいます。

また、設立当初から「働くこと」を大切にし、「学校で学ぶ権利があるなら、社会に出たら働くことも権利ではないか」という考えのもと、仕事の機会を提供してきました。最初は職員が探してきた簡単な作業から始まりましたが、たとえ缶を集めて潰す作業でも、工夫を重ねて「できた！」という喜びを大切にしてきました。障がいの重い方が自分で働き、給料をもらって帰ることが、大きな喜びでした。

すべてを嫌がった仲間から生まれた小さな発想

横山明子さんは、18歳のときに施設へ来ましたが、最初からすべての作業を強く拒否し、「いやだ、いやだ」と暴れたり、パニックになったりしていました。

どんな方法を試しても受け入れてもらえず、そばに行くと「またお前か」という表情をされ、どんどん嫌われているような危機感を感じた時期もありました。

横山さんは集団の中に入れず、いつも個室にこもっていました。

あるとき、部屋で落書きをしているのを見かけ、親御さんに尋ねると「折り紙を折ったり、絵を描いたりするのが好き」とのことでした。

そこで「バザーがあるのでポスターにするから絵を描いてみない？」とお願いしたところ、彼女はすぐに描いて渡してくれたのです。

そのとき、初めて大声を出さず、怒ることもありませんでした。

その姿を見て、それが嬉しくて「じゃあこれを仕事にするしかない」という発想が生まれました。

困難は宝

理事長は、困難は宝だという言い方をするんですね。（困った行動をする人がいたら）みんなでその人のことを一生懸命に考えるわけです。
そうするとその子のことを考えたことで、職員のスキルが上がるというか、その人で培ったものが次の人に生かされるっていうか、結果的に宝ものになるということです。困難は宝になるっていう理事長に職員一同その思いに共感して実践を大切にしています。

横山明子さんの作品の前でギャラリートーク開始です

表現活動への分岐点

職員たちは大いに悩みました。

当時は「職員が見つけてきた仕事を教え、できるようにする」ことが基本でしたが、それを180度転換し、「本人ができること・得意なこと・唯一できることを仕事にしよう」と考え方を切り替えました。

ただし、やみくもに仕事を押し付けるのではなく、職員がまず環境を整えました。

強制的に「はい、やるよ！」と声をかけるのではなく、「どうしたらやりたくなるか？」を大切にし、職員自身がなにかさせなくちゃではなく、なにより楽しむことを意識しました。

絵が好きな職員は絵を描き、機織りをしたり、まずは職員が楽しむ姿勢を見せました。

すると、施設の空気が変わり、「私も描きたい」「僕もやってみたい」と言う人が増えていき、少しずつ作品が生まれるようになりました。

環境の変化がもたらしたもの

横山明子さんも、この環境の変化によって表現が大きく開花しました。次々と作品を生み出し、多くの展覧会に出品されたり購入もされたりして、作品が広く知られるようになりました。本人の意識や気持ちにも変化が生まれ、笑顔が増え、人との関わりの中で大きく成長しました。

今ではすっかり「愛されキャラ」となり、昔の姿を知る人が驚くほど明るく穏やかに暮らしています。

ここにある左側の作品は、初期の頃のもので、彼女の表現力が爆発的に広がっていた時期のものです。ボールペンやマーカー、クレヨンを使い、一日に何枚も描き続け、机や床にまで表現が広がっていました。一方、右側の作品は、現在の彼女が描いたものです。今は「描くことだけが生きがい」ではなく、心から幸せに過ごしながら作品を生み出しています。

「工房集」の設立をきっかけに、横山さん一人から始まったこの活動は、多くの人の意識を変えていきました。

彼女自身の変化はもちろん、親御さんや周囲の人々の考え方も変わり、表現には新たな可能性があることを私たちは学びました。

そのため、法人では単に「絵を描けるようにする」のではなく、本当にその人が表現することを職員がくみ取って、大切にしながら社会へつなげていこうとしています。また、可能であれば作品を販売し、収入につなげることも目指しています。

現在、この表現活動を広く社会に発信する取り組みを「工房集プロジェクト」と名付け、法人全体の活動となっています。

外部の力を借りる

私（宮本さん：右写真）は美術が苦手で、みんなが作ったものが良いのか悪いのか判断できませんでした。当時の施設長も「俺も美術の成績は2だったんだよね」と言い、どう評価すればよいか悩みました。
そこで、「自分たちだけで完結する必要はない」と考え、外部の力を借りることにしました。
私は積極的に外へ出て名刺を配り、「こんな取り組みを始めたので、ぜひ見に来てください」と声をかけ、アーティストたちを施設に招くようになりました。
その結果、展覧会に呼ばれる機会が増え、外部から作品が少しずつ評価されるようになったのです。

職員との関わりと変化(1)
齋藤裕一さんの作品から

最初は、会話ができるので色々なことに挑戦しました。機織りや絵なども試してみましたが、なかなかしっくりくるものがなく、どうしようかと試行錯誤していました。

そんな時、「集」という漢字をみんなで描いて看板を作るワークショップを開くことになりました。すると、彼は文字を模倣できたのです。書いた字は線が一本多かったり、バランスが独特だったりしましたが、それがとても魅力的でした。何より、それまで様々なことに取り組んでもうまくいかなかったのに、「字を書くことができる」とわかったことが大きな発見でした。職員も「齋藤君、字が書けるんだ！」と驚き、喜びました。それをきっかけに、彼自身も「ぼく、字を書くんだよ」と言って、積極的に描くようになりました。

最初は、筆と墨を使って習字のように書いていました。一枚描くたびに職員が紙を交換する形で進めていましたが、ある時、職員が席を外した際、彼は字を重ねて書き続けていました。当時の職員はそれを「失敗した」として片付けるのではなく、「おもしろい表現だ」と感じ、新しい画材を試してみることにしました。

そうして、画用紙とボールペンを使い、文字を重ねていく独自のスタイルが生まれたのです。彼が描く文字は、テレビ番組のタイトルから生まれることが多く、例えば「今日は金曜日だからドラえもん、ポケモン、コナン」といったように、好きな番組の名前を集積させていきました。これはまさに偶然の産物でしたが、非常に高く評価されました。そして16年前、水戸芸術館での展示をきっかけに、多くの人の目に触れ、活動の幅が大きく広がっていきました。

齋藤祐一さんの作品の前で

菅家沙織さんの作品の前で

障害特性や発達段階を大切にする

当法人は広い地域にわたり、22の事業所を運営しています。現在、300名以上の利用者がおり、そのうち約半数が何らかの表現活動に取り組んでいます。

職員は、一人ひとりの障害の程度や興味・関心に合わせて、表現を引き出すサポートを行っています。活動グループは障害の特性や発達段階に応じて編成されており、特に重度の障害がある方のグループでは、絵を描くこと自体難しい人も多いので、絵画以外の表現を模索しています。

発達年齢が0～1歳程度の方もおり、それぞれの能力やできることを大切にしながら活動を進めています。

菅家沙織さんの班は非常に重たい障がいの人たちが活動していて、絵を描くといっても線を引いたりとかで想いを発し、それを職員がくみ取っています。

職員との関わりと変化(2)
菅家沙織さんの作品から

菅家さんは、最初遠くから他の仲間が描いている様子を眺めていて、なかなか輪に入れなかったのですが、職員が雰囲気を盛り上げながら関わることで、少しずつ興味を示すようになりました。

最初は小さな点を打つことしかできませんでしたが、職員がそれを喜び、積極的に反応することで、人とのかかわりは好きな方だったので彼女の気持ちも乗るようになり、次第に表現が広がっていきました。

現在では大きな作品を制作するまでになり、表現の幅も大きく広がっています。

作品を通じて収入を得ることも一つの価値ですが、それ以上に、周囲の人たちから評価されることが本人にとって大きな意味を持っています。私たちは、この「評価されること」こそが、表現活動の大きな価値ではないかと感じています。

魅力を発信する

表現を社会につなげること、お金にすることは職員の役割であり、責任であるため、話し合いや会議が多くあります。グッズ会議というのを月に一回やっていてグッズ展にむけて、こういういろんな表現物が生まれたら、何かしら形にならないかって話し合っていました。自分たちだけで考えるのではなく、専門家の方にお願いすることで「障がいのある方の作品だから買ってください」ということではなく、作品の魅力を伝えていきたいっていう思いがあります。いろんなプロの方にも入っていただいて発信していくってことを大切にしています。

＊菅家沙織さんの作品は、当協会50周年記念事業のポスターやチラシ使用させていただきました

質疑応答

「職員が芸術家そのものではない」とのことですが、その職員にはどんなものを求めていますか？

当法人では、会議の機会がとても多く、研修にも力を入れています。

発達支援や強度行動障害、虐待防止などの福祉全般に関する研修はもちろん、表現活動やアートについて学ぶ機会も大切にしています。

また、「この表現活動は何のために、誰のためにあるのか」といった意義や目的を繰り返し話し合い、グッズ化や社会への発信方法についても、何度も意見を交わしながら進めています。

職員に求められるものは、単なるスキルだけではなく、他者をどれだけ思いやり、考えられるかという姿勢も大切だと考えています。人材が増え、職員一人ひとりの意識が高まることで、この仕事がより充実したものになっていくと思います。また、法人全体としても、理事や常任理事、研修委員会を通じて、職員の成長や質の向上について常に考え、取り組んでいます。

あの個性的な手法をどう生み出していますか？

職員と仲間たちの１対１の関係もあったり、福祉施設なので集団の中での育ちもあるので、そこのグループで他の人がやっていることをやってみたい、使っているペンを使ってみたい、とかがきっかけになっていることもあります。

また、重度の方が楽しむ活動をしている中で、絵を描く時間を作ってみたり、違うことやってみたり、その人がどこでどう楽しんでいるのかと興味を示すかっていうところのきっかけを見つけながら、私たち職員の仕事ってちょっとした変化とか気づきもとても大事な仕事だったりしますね。

そこから気づいたことを自分だけのものにせず、伝えて共有して、「じゃあこうやってみようか」とか、そこからまた集団で論議しながらじゃあまたこの画材にしてみようかとか、で、ちょっとづつ変えてきたり、いろいろ試しています。

答えは本当にないのでその都度トライ＆エラーを繰り返しているような状況です。時間はすごくかかります。

すぐ結果が出るような人たちじゃないので、そこを諦めない職員の姿勢、そこはすごいなって思っています。この人は絶対何かあるんじゃないかとか、何かしら表現しているんじゃないかとか、そういうことを見落とさず諦めず関わることがいい職員になる素質かな、って今改めて思いました。

ギャラリートークの中でお話された作品は、書籍工房集問いかけるアート展で一部ご覧いただくことができます。工房集オンラインショップで取り扱っています。